

学びを修める旅

ちぎり

漸く実現しました。昨年度から、世の中の状況によって、中止、変更をせざるを得なかった宿泊を伴う研修がようやく実現したのです。それが昨日と今日の三年修学旅行です。

「東京研修」という本来の名称が、「修学旅行」という名に変わり、一泊二日、行き先は三重県の伊勢志摩方面となりました。旅の目的は研修ではなく、「社会性を発揮すること」と、「一生心に残る思い出づくり」としました。旅先で地元の仲間たちと過ごす二日間が、中学時代の楽しい一ページになることを期待しました。

旅を終えた今、これまで引率した旅の中で、最も気をもまなかったのが今回だと感じています。旅先の変更や行程の短縮がその理由ではありません。三年生の姿がその理由です。

旅の中で、私は三年生に次のような話をしました。

「この二日間、君たちはもてなしを受ける立場です。もてなす人たちは、きつと笑顔でもてなしてください。あなたが、その人たちが気もちよくもてなしてくれるかどうかは君たち次第です。」
バスのドライバーやバスガイドも、担当する旅行会社添乗員も、そして、ホテルのスタッフも、仕事として携わってくれるので、客が中学生であってもどんな言動をとっても笑顔で接するはず。しかし、その人たちも人間です。笑顔の裏では、客の言動によって、嫌そうな表情や不快な思いがいつ生まれるとも限りません。もてなす側の表情や思いを無視して、自分たちの楽しみだけを追求する横柄な大人にはなかってほしくない。私はそう思いました。

私の心配は全く無用でした。旅先で三年生が見せた姿はすばらしいものでした。旅先やホテルで積極的にあいさつする姿、バスのドライバーやガイドの配慮に進んで応える姿、感染症対策を心がけた節度のある行動、そして、私が特に感動したのは時間行動でした。活動があるたびにバスを下ります。再びバスに乗り込むときには、往々にして遅れる者がいるものです。早く乗り込んだ者にとっては、それがイライラの原因になりますし、バスの関係者や添乗員にとっては、きもきの原因になります。

しかし、今回そのようなことは全くありませんでした。全員が時間を意識し、責任ある行動をすることによって、もてなす側に余分な心配や不快を感じさせることはありませんでした。そのための、行程通り順調に旅が進み、もてなされる側ももてなす側も、とても気もちよく二日間が過ぎました。

「社会性とは思いやりだ」と私は痛感しました。

どれだけ周りのことが考えられ、その上で自分の行動がとれるかです。三年生にはそれが十分身に付いているとわかりました。まさに義務教育の学びを修める旅となりました。(十一月二十三日 記)

